

保護者との協働

自閉症教育・支援コンサルタント

水野 敦之

●はじめに

皆様、日頃より『フレームワークを活用した自閉症支援』書籍及びwebサイト、SNSをご愛読ありがとうございます。自閉症教育・支援コンサルタントの水野敦之です。今回、念願のeBOOKのNO.001を発行することができました。書籍では伝えられなかった内容、また書籍を補う内容を今後も更新していきます。すべてのスライドは、必要に応じて更新していきます。今後とも、書籍及びwebサイ『BOUAZAN NOTE!』をよろしくお願いいたします。

自閉症教育・支援コンサルタント 水野 敦之

●保護者との協働

なぜ協働が自閉症支援で必要か？	．．．．．	<u>3 page</u>
障害特性を基本として進める	．．．．．	<u>4 page</u>
保護者の考えを尊重する	．．．．．	<u>6 page</u>
協働での個別化	．．．．．	<u>9 page</u>
保護者の立場とアセスメント	．．．．．	<u>10 page</u>
協働で有効な本人のアセスメント	．．．．．	<u>13 page</u>
プロセスが必要です	．．．．．	<u>19 page</u>
ポジティブにオープンに話す	．．．．．	<u>20 page</u>

●なぜ協働が必要なのか？

自閉症の支援だからこそ協働が意味を持ちます。

自閉症の特性として「般化」の困難さがあります。1つの状況の中でできていることが、他の状況ではできないことがあります。1つの場面の様子と、他の場面の様子が違っていることがあり、保護者が持っている情報と支援者が持っている情報の違いにつながります。

また、自閉症の支援では、場面ごとに支援の状況が大きくかわり一貫性の無いことで、自閉症の人は混乱したり、習慣を身につけられないことになります。

以上の点を考えても、情報を共有し、一貫した支援のための保護者と協働することは意味を持ちます。

療育や支援の従事者が本人に関わる時間は生活の中のごく一部の時間です。それ以外の多くの時間を本人は家族とすごします。限られた時間の療育や支援よりも、生活全般の療育・支援が重要になります。療育や支援の協働チームの中に保護者が入ってもらうことは大きな意味を持ちます。

● 障害特性を基本として進める

保護者との協働では、常に障害特性を基本とします。特性を基本とすることで一貫性のあるブレがないアプローチになります。

保護者は、定型発達との違いに悩んだり不安になったりします。だからこそ、その違いである障害特性を明確に、そしてポジティブに伝えることが重要になります。

障害特性を基本としないアプローチやオブラートに包んだような説明は、「障害を隠している」イメージを保護者にあたえます。その後の保護者の障害受容にマイナスの影響を与えます。

障害特性を基本としたアプローチは、保護者に「違ってOK」というイメージを持たせます。

保護者から障害特性に関連する言葉が増えてくるのが1つのバロメーターになります。そうすると保護者との協働が劇的に好転します。



【保護者の言葉の変化の例】

協働アプローチの前	協働アプローチの後
「うちの子は落ち着きがない」	「スーパーで注意があっちに こっちに移り変わる」（転導的）
「うちの子はこだわりが強く、 わがまま。おもちゃが終れない」	「1つの遊びに強く注目して、 次の活動に移ることが難しい」



支援計画のイメージが
持ちにくい



支援計画のイメージが
持ちやすい※

※書籍では、転導的な行動には「刺激の統制＋指示の明確化＋習慣」を支援の基本とし、切り替えの困難さには「終わりの提示＋次の活動の提示＋習慣化」を支援の基本としています。

●保護者の考え方を尊重する（１）

お互いを尊重することから協働がはじまります。そこで、必要になるスキルが『セオリー・オブ・マインド（心の理論）』です。心の理論は、相手の気持ちを想像し、相手には違った考えがあることを尊重できるスキルです。自閉症の人はこの心の理論のスキルが得意ではありません。しかし、保護者との協働の中で支援者はこのスキルをフル活用しなくてはなりません。違いを尊重し、違っていることから始めることが保護者との協働の第一歩です。

セオリー・オブ・マインド（心の理論）の重要な２つのスキルで対応する

- 相手の気持ちを想像する力
- 相手には違った考えかたがあることを知り **尊重できる**

保護者には違った考え方がある
私たちはそれを尊重する

●保護者の考え方を尊重する（２）

保護者には違った考え方がある
だから、そこから始める

保護者と私たち支援者には違った視点・考えを持ちます。それは当たり前のことです。無理に支援者の考え方に引っ張ったり、その場しのぎの受容をすることも、眉間にシワをよせることも避ける必要があります。

違っていている部分を確認して、それをアセスメントなどのプロセスで共通認識できるように進めることが大切です。

【保護者と違った時の支援者の反応例】

適切でない支援者の反応の例	おススメの対応例
「お母さん、違いますよ。本人は言葉の理解はできていません。」	「お家では言葉が理解できている場面が見られるんですね。そのことは事業所では確認できてません。そこで、1週間その視点でアセスメントし、〇月〇日までに報告しますね」
「お母さん、それは無理です。まだ靴を履くのは難しいですよ。」	「これは靴を履く行動を細かくわけて（課題分析）書き出したものです。この中で“P”の項目ができている部分で見守る部分です。“E”がもう少しでできそうな部分で教える部分です。“F”はまだ難しい部分で手伝う部分です※」

※書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』で解説してweb公開しています【自立課題アセスメントシート】を活用します。

● 協働での個別化

自閉症を持つ本人も一人ひとり違いがあり、保護者の状態も一家族一家族違いがあります。家庭には文化もあり、これまでの保護者が経験したことも違いがあります。だからこそ、保護者との協働も1つの形をつくるのではなく、個別化する必要があります。

* 保護者との協働で個別化する場合の例

保護者へのアプローチ
(伝え方、資料の有無・内容)

本人の個別化支援計画

個別支援ミーティング・懇談
(内容、参加者、進め方、板書構成)

協働チームのメンバー

連絡帳の形態

など

●保護者の立場とアセスメント

保護者との協働を個別化するためには、本人のアセスメントだけではなく、保護者のアセスメントをすることが重要です。

例えば・・・

- 保護者がわかりやすい情報
(説明の文言、量、視覚的資料の有無・形態・内容)
- 保護者がこれまで経験したこと
- 保護者の立場 (後のページで解説します)
- 保護者のニーズ (夫婦間の違いもある)
- 関係機関・協力者・信頼している人
- これまで受けたアドバイス など

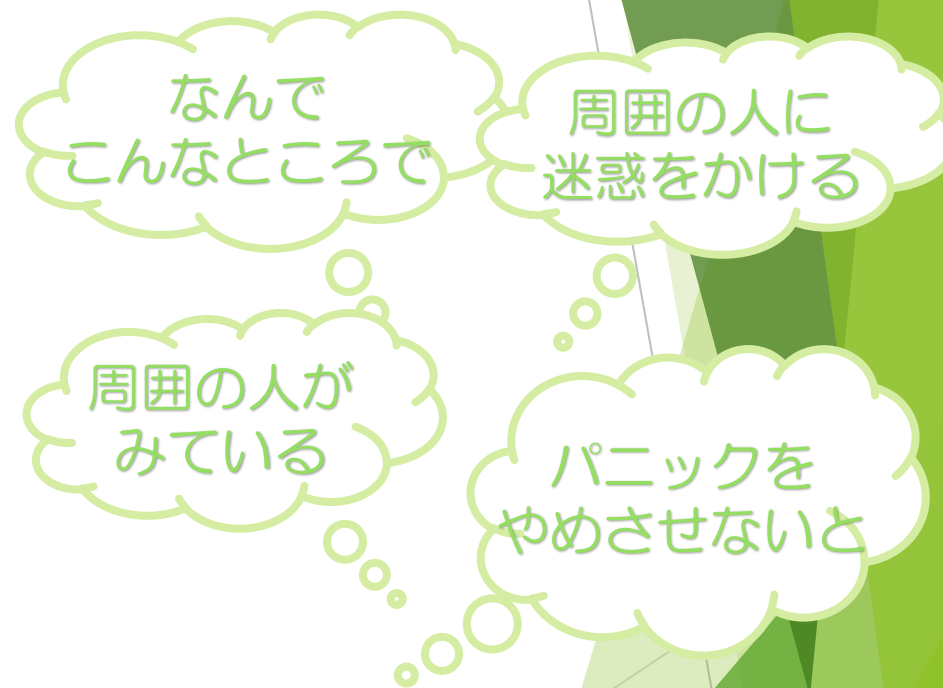
* 保護者の立場で考えてみる（１）

～街中で急に自閉症の子がパニックになる～

街中で急に自閉症の子がパニックになったらどのように対応するでしょうか？多くの支援者は、冷静に最善策をとると思います。

しかし、同じ場面で、保護者は冷静な判断ができるでしょうか？周囲の人からの様々な目線や言葉が気になり、感情的な対応になってしまう場合もあると思います。

このような視点でも保護者の視点と支援者の視点には違いがあります。



保護者の目線 ≠ 支援者の目線

* 保護者の立場で考えてみる（２）

▶ 夫婦間の思いの違い

保護者によっては、ご両親の考えが違ったりする場合もあります。「目の前のニーズと将来のこと」「育て方に対する考え方、方法の違い」「障害受容の違い」などがあります。

▶ 親族の中での孤立や衝突

周囲の親族の障害受容が進んでない場合があります。障害を持つお子さんの子育てについて無理解な発言があったり、仕事に出ることできなかったり、家事がおろそかになることを責められたりするケースもあります。

▶ お母さんネットワークの中で

世はまさにＳＮＳ時代です。支援者が把握できないネットワークがあることを意識することは重要です。どのように保護者に情報を発信するかも考慮する時代になってきています。

▶ 一貫性の無い雑多な情報

様々な専門家からの情報、インターネットなど、障害に関する情報也多岐にわたります。有効な情報もあれば、マイナスに影響する情報もあります。

●協働で有効な本人のアセスメント

保護者と支援者の考え方の違いを埋めるのはアセスメントです。アセスメントは実態を観察し書きだし活かすプロセスです。思いつきや感による支援では共通認識も信頼関係も深まりません。ここでは保護者との共通認識が深まる3つのアセスメントを紹介します。

1. 本人の特性のアセスメント
2. 行動を冰山モデルでアセスメント
3. 「できている・もう少し・できない」のアセスメント



1. 共通認識したい本人の特性

特性を共通認識することで、支援計画が軸のしっかりしたブレの無いものになります。以下は自閉症・発達障害特性シートにあげた主な特性です。特性を書き出すことで、協働の時の解説のシナリオになります。

- ☐ 受容コミュニケーションの特性
 - ☐ 表出コミュニケーションの特性
 - ☐ 社会性・対人関係の特性
 - ☐ 全体よりも細部に注目する特性
 - ☐ 時間・空間の整理統合の困難さ
 - ☐ 関係理解（意味理解）・般化の困難さ
 - ☐ 想像思考の困難さ
 - ☐ 変化の対応の特性
 - ☐ 感覚の特異性
 - ☐ 微細運動・粗大運動
 - ☐ 記憶の特性
- その他



書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』で解説しています。『自閉症・発達障害特性シート』に書きだして、それをシナリオとして、保護者に説明することから始めてみてください。

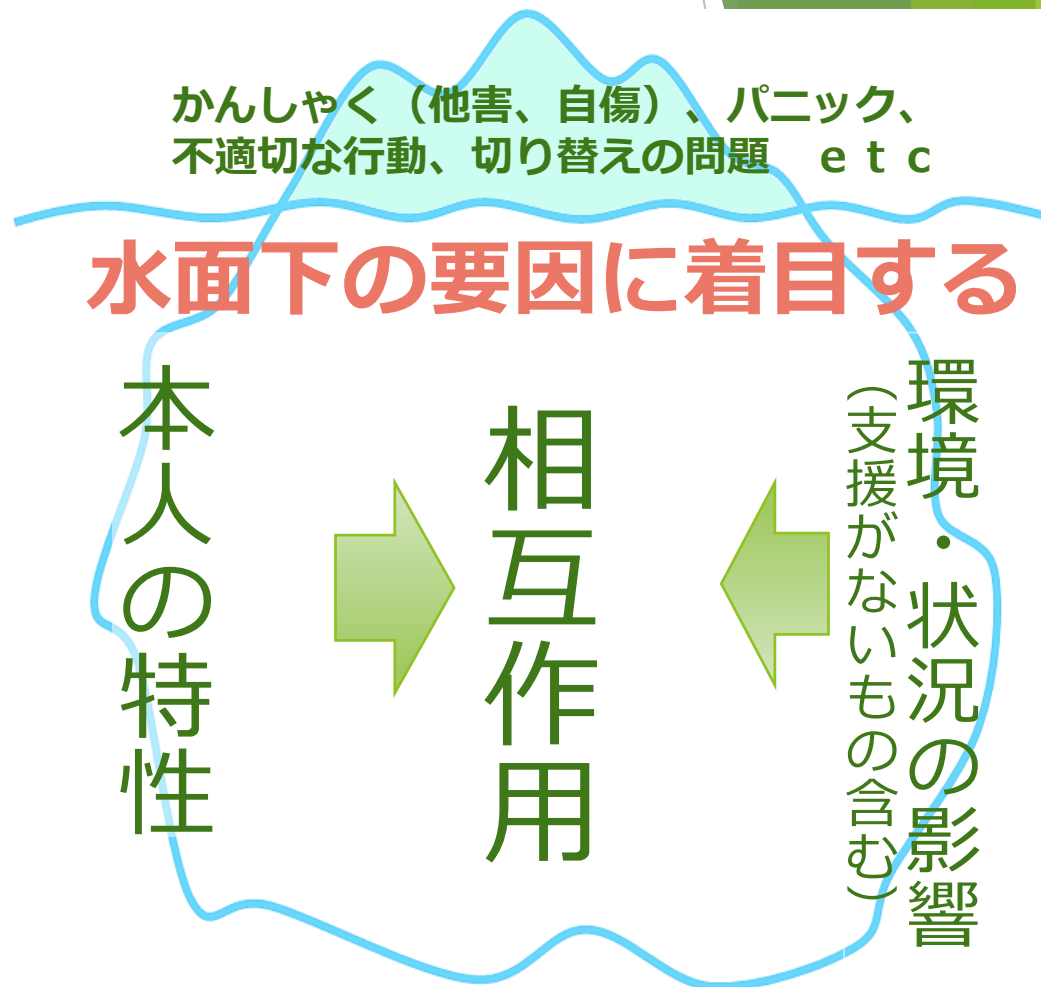
2. 共通認識したい冰山モデルの視点

課題となる行動や自立が難しい活動・課題は、冰山モデルの視点でアセスメントすることが大切です。

気になる行動・自立しないことだけに着目するのではなく、その要因である特性と環境・状況の相互作用によって起こることを念頭にします。

特性と環境・状況の要因を冰山モデルシートに書き出して、支援計画を立て、それを共通認識します。

例) 「好きな遊びを終わって、次の活動移れないことを冰山モデルシートで整理しました。〇〇さんは、1つの部分に強く注目するとその他のことに注目することが難しいです。終わりの提示と次の活動が無いことも要因として考えられます。ハードルの高い遊びではなく、まずハードルの低い活動から「終わり→次の活動」の提示を実施してみます」



【行動に影響をあたえる環境要因の例】

▶ 予定、人、物、習慣の変更・変化

関連特性：変更の困難さ, 般化の困難さ など

▶ 様々な刺激、情報の影響

関連特性：感覚の特異性, 実行機能の困難さ など

▶ 指示がない、終わり等が提示されていない、環境が整理されていない

関連特性：受容コミュニケーション, 見通しの持ちにくさ,
整理統合の困難さ など

3. 共通認識したい 「できる・もう少し・できない」

自立を意識した支援を進めるために「できる・もう少し・できない」の視点でのアセスメントが大切です。この3つの視点でアセスメントした情報によって支援が変わってきます。

できている部分 . . . 「できている」部分は、支援が必要ない部分で見守る部分です。また、「できている」部分は、実際の活動や手だてとして活用する部分です。本人が理解できる情報・もっているスキルもここに含まれます。

もう少しの部分 . . . 「もう少し」の部分は、できそうな部分、できる方向に向いている部分です。「もう少し」の部分は、本人ができるように課題にする部分になります。保護者と共通認識し、協働で教えることが大事になります。

できない部分 . . . 「できない」部分は、教えるのはハードルが高い部分です。支援をすることが必要になります。どんな支援が必要か保護者と共通認識する部分になります。

* 保護者の感情も変化します

- 恐れ
- 落胆
- 絶望
- 混乱
- 孤独
- 保護
- 悲しみ
- 自信喪失
- 怒り??
- 落胆
- 罪の意識

保護者の感情も上記にあげた内容に変化し続けます。私たち支援者は、保護者の状態から感情を想像することも重要になります。例えば、筆者は、熱心に支援者からのアドバイスを記録をとっていた保護の行動が、実は恐れや防衛的な感情の表現であったことを経験しました。

上記のいくつかの感情の中で、表現としては観られるけど、最終的には違った感情であったと気づくのが「怒り」の感情です。怒りの表現の裏側に恐れや混乱などの別の感情があると気づくことが多いです。

保護者の感情に対して多く動揺したり、感情で反応してはいけません。
それは、保護者にも不安や混乱などを与えます。

●プロセスが必要です

▶ 保護者の考え・気持ちは変化する

保護者の考え・気持ちは変化します。診断前・診断後・進学等でも大きく変わります。保護者の障害受容も長いプロセスの上で変化し続けます。支援者は、保護者の変化に動揺することなく、変化に寄り添っていく必要があります。

▶ 共通認識するには時間がかかる

保護者と支援者との考え方の違いを埋め、共通認識することも時間がかかります。無理に違いを埋めようとしたり、支援者側の考えを押しつけることは避ける必要があります。アセスメントやディスカッションを続け、時間をかけて共通認識することが大切です。

▶ 様々な状況、場面の中で共通認識を深める

1つの事柄に関して共通認識する時でも、断片的な情報や、支援者側の押しつけの情報で考えるよりも、支援者がもっている様々な場面の情報、保護者がもっている様々な場面での情報を整理しながら共通認識を深めます。

▶ 見通しを伝えることが大切

保護者との協働は長いプロセスになることがあります。しかし、保護者の中には、すぐにでも結果や答えを求める方がいます。そこでプロセス重視の協働では、見通しを伝えることも重要になります。

●ポジティブにオープンに伝える

ポジティブとは、本人の困難さや苦手さをさけて、強みや良い部分だけ話すことではありません。

強みと苦手さを押さえた上で建設的に前向きに話せるスキルが必要になります。

支援者は表情の管理にも気をくばり、ネガティブな反応をさける必要があります。

例：眉間にシワを寄せる、オブラートに包む など

* 保護者とのコミュニケーションのポイント（１）

保護者との協働ではポジティブにコミュニケーションを進めていきます。ポジティブな保護者とのコミュニケーションに必要なポイントを書きだし解説してみます。

1. 受容ではなく傾聴する
2. ポジティブにオープンに伝える
3. クールに話す
4. 保護者のニーズからはじめる
5. 目的から共通認識する
6. 役割を確認して次につなげる

* 保護者とのコミュニケーションのポイント（2）

1. 受容ではなく傾聴する

保護者とのコミュニケーションで保護者の考えを過剰に受容することは、将来の困難と関係が難しくなる場合があります。

最初は受容的に「そうですね」と反応して、時間がたつと考えが変化する支援者に対して不信感を持たれるケースもあります。

受容するのではなく、傾聴し、尊重した態度を続けることが大切です。必要によってはポジティブに自分たちが違った視点を伝えることも重要です。

傾聴によって

- ▶ 相手の状態を受け入れ、尊重する
- ▶ 相手の置かれている立場を知る
- ▶ 相手のニーズをアセスメントする

* 保護者とのコミュニケーションのポイント（3）

2. ポジティブにオープンに伝える

- ▶ これまでのこと（生育暦）、家庭でのこと、保護者は本人に対する多くの有効な情報をもっています。
- ▶ 保護者がもっていない情報を支援者はもっています。
- ▶ 支援者はプロフェッショナルとして本人にとって、家族にとって有効な情報をもっています。

- まず会話の中で協働がはじまります
- オープンにすることで信頼が深まります

3. クールに話す

- ▶ クールとは、冷たく話すのではなく、冷静に動じず話をすることです
- ▶ 保護者からの発言に過度に反応したり、過度に同調・受容することを避けます
- ▶ プロフェッショナルは自分の感情のコントロールに気をくばり、感情的にならないように対応します

* 保護者とのコミュニケーションのポイント（４）

4. 保護者のニーズからはじめる

保護者の持っているニーズは、保護者が強く注目し、常に意識している内容で、そこからはじめることによって信頼を得ます。また、保護者にとって意味ある成功体験になり、次の協働につながります。どんなに支援者として優先順位が低い内容もまず保護者のニーズからはじめることには意味があります。

5. 目的から共通認識する

具体的な方法や本人の状況把握に関しては、保護者と支援者間では違いを生じることがあります。しかし、目的の部分は違いを生じることが少ないです。目標を明確にすることで、保護者も見通しを持つこともできます。

6. 役割を確認する

役割に関しては、協働の中で確認し続けていきます。役割が明確になると保護者も少しずつ協働チームのメンバーとしての意識が高まります。（筆者が関わる事業所では、支援者はアセスメント、支援計画作成と提案、保護者は意思表示と同意の役割を持ちます。）

【保護者の立場を考えない支援者の言葉その1】

適切でない支援者の言葉の例	解説とおススメの言葉
「しばらく様子を見ましょう」	保護者の中には「またか？」と思う人がいます。この言葉を早期発見から何回も言われ続けている保護者もいます。 例えば・・・「〇〇について事業所の様子を観察しています。それについての私たちの考えを〇月〇日の懇談で話をしますね」という感じはどうでしょうか。
「お母さん気にしすぎですよ」	この言葉は保護者の自尊心を砕いていきます。保護者が気にした時こそ協働のチャンスです。 例えば・・・「〇〇について気にされているんですね。それについては、私たちは今は△△だと考えています。そこで〇〇について観察と情報の整理をさせてください。その後、一緒に考えていきましょう。お母さんの気づきは私たちのスタートになります。また気づきを教えてくださいね」

【保護者の立場を考えない支援者の言葉その2】

適切でない支援者の言葉の例	解説とおススメの言葉
家庭で自立できない課題・活動に対して ※ 「学校ではできてますよ」	保護者には「お母さんの教え方がわるいんじゃないですか？」「学校や事業所の問題では無い」と言われたような感じる場合があります。 例えば・・・「お家ではどのようにできてないですか？どの部分ができてないですか？」と言い換えるとどうでしょうか。
家庭での気になる行動・不適切な行動に対して ※ 「学校ではしませんよ」	保護者「家庭の問題ですよ？」「学校の責任ではありません」と言われたような感じを受けます。 例えば・・・「お家ではどんな場面でやっていますか？こちらでの様子も観察して報告しますね」と言い換えるとどうでしょうか。

※「学校」の部分は、保育所、幼稚園、事業所など変わりますね

専門家の馬鹿げた発言例

- ▶ 知的には問題ありません。大丈夫ですよ。（臨床心理士）
 - ▶ 知的も軽度ですので、将来は健常（域）になりますよ。（臨床心理士）
 - ▶ 発達障害でなんて考えず、その子で見てください。（保健師）
 - ▶ 皆一緒ですよ。（某療育機関）
 - ▶ 子どもは自然と育つ（保健師・某療育機関）
 - ▶ そんなものですよ。（保健師）
-
- ▶ 早期発見は間違っている（某療育機関）
 - ▶ 自立なんて必要ない、安全が第一だ（小学校校長）
 - ▶ 寝た子を起こさなくていい（保健師）

「自分達がうまくいっている 支援はどこでもうまくいく」の意味

この文言はノースカロライナのジャック・ウォール先生から教えていただいた協働での重要なポイントです。これを私は以下のように解釈し、保護者との協働の時にいつも念頭に置きながら進めます。

- 自分たちがうまくいっている支援は、家庭で、他の場面でもうまくいく。だから協働がオープンに協働を進めることが大切である。
- もしも、自分たちがうまくいっている支援が、家庭や他の場所でうまくいかないのであれば、その自分たちの支援又は**アプローチ**がうまくいっていない。

自分の事業所だけでうまくいく支援ではなく、どんな場所でもうまくいくような支援を保護者と協働で進めることが大切です。

* 協働の中で支援者の役割は？

保護者との協働の中で支援者は様々な役割を持ちます。しかも、個別の状況に応じて、その役割を使い分けていくことが大切です。そして時には、働きかけを最小限にして待つことも重要な役割になります。

- 傾聴（インテーク）
- アセスメント
- 情報の整理
- プランニング
- 情報提供
- 支援を伝える（解説やモデル提示）
- プロセスの確認
- 経過を伝える（まとめる） など

そして時には**待つ**ことも大事な役割です！

様々な働きかけの時に、無理に押したり、引いたりすることは避ける必要があります。保護者が自分の役割に気づき協働チームとなることに寄りそうことが大切です。

●書籍『生活デザインとしての個別支援計画ガイドブック』の133～135ページの関連記事です。こちらも参考にしてください。

●Webサイト自閉症教育・支援フレームワーク『BOUZAN NOTE!!』

<http://bouzan-note.com/>

●Facebookページで情報発信しています



<https://www.facebook.com/autismframework>

●今回の「保護者との協働」及び自閉症に関する筆者への講演等の依頼は以下のページのフォームでメールをお願いします。※届かない等で返事できない場合もあります。

<http://bouzan-note.com/contact>

●書籍『フレームワークを活用した自閉症支援』及び『生活デザインとしての個別支援計画ガイドブック』については以下のページをご覧ください」。

<http://bouzan-note.com/books>

